

## II-7

特集 Skin Rejuvenation

## 臨床編

ニキビ，ニキビ痕治療を主体とする  
Skin Rejuvenation 治療について

久田恭子

KO CLINIC &amp; Lab

尋常性痤瘡は、多くの日本人が一度は罹患するありふれた慢性炎症性疾患であるが、思春期ごろより発症し長期間にわたり寛解増悪を繰り返す。また、その炎症の強さにより膿疱の改善後も炎症後紅斑 (PIE) や炎症後色素沈着 (PIH)、瘢痕が残存し、患者のQOLを低下させることが知られている。しかし、PIEおよび瘢痕治療は確立されておらず、医師は試行錯誤しながら、その治療に当たっている現状がある。筆者らは痤瘡の難治例に対し、早期から複数のレーザー治療やその他の治療を組み合わせることで、痤瘡および瘢痕の改善効果を上げてきた。また、その副次効果でskin rejuvenationが改善し、患者のQOLが上がることを経験している。症例をもとに解説する。

## はじめに

顔の皮膚は、生理老化によって、浅いシワ、皮膚のたるみ、表皮・真皮の菲薄化が起こる。また長年の紫外線曝露により、多数の老人性色素斑、肝斑、肌理の粗さ、表皮の肥厚、真皮マトリックスの変性による弾力の低下が光老化と

なって現れる。Skin rejuvenationとは、歴史的には「シワ、たるみ、瘢痕などの凹凸を平坦にし、ハリを出す治療」と考えられ、古くから尋常性痤瘡と瘢痕治療に応用されている。

尋常性痤瘡患者では、同一患者に面皰、炎症性膿疱、萎縮性瘢痕、肥厚性瘢痕、炎症後紅斑、炎症性色素沈着など多彩な症状が混在するため、治療の主座が何かを踏まえて複合治療をすることが必要となる。

## Skin rejuvenationとは

皮膚の若返り、いわゆるskin rejuvenationという言葉が報告されたのは1953年に遡る<sup>1)</sup>。1970年代にはフェノール、トリクロロ酢酸の皮膚剥離効果が注目され、初期のピーリング剤として魚鱗屑、尋常性乾癬の治療に使われた。初期のピーリング剤は、施術後の高度の炎症、色素沈着、瘢痕などの副作用が問題であった。1989年にはグリコール酸が副作用の少ないピーリング剤としてskin rejuvenationに用いられるようになり、今日に至るまで広く応用されている<sup>2,3)</sup>。

1990年代後半から、炭酸ガスレーザーなどの水分の吸収率の高い波長によるablativeなskin rejuvenation治療がlaser resurfacingと呼ばれ世界に広まったが、アジア人の皮膚では発赤、色素沈着などの合併症が多くみられ普及しなかった<sup>4)</sup>。1997年にGoldbergらがQスイッチNd:YAGレーザーによるnon-ablativeな治療法を報告し、以降非剥皮的なレーザーを使用した治療が行われるようになった<sup>5)</sup>。Non-ablative skin rejuvenationという新たな概念が注目され、広帯域波長を発振するintense pulsed light (IPL)が非侵襲的な治療として応用された。

またマイクロニードル治療や各高周波(RF)、マイクロニードルでRFをマルチパルス発振する治療なども登場し、昨今skin rejuvenation治療の幅は広がっている<sup>6)</sup>。

## 尋常性痤瘡とskin rejuvenation

本邦の尋常性痤瘡治療は、2008年にアダパレン、2014年に過酸化ベンゾイル (BPO) が選択肢に加わり、大きく変化した。それまでは抗菌薬で一時的に抑えることしかできなかったが、これらの薬剤により、非炎症性皮膚にも対応できるようになった<sup>7)</sup>。

しかし、炎症後紅斑 (post inflammatory erythema ; PIE) および瘢痕治療は確立されていない。尋常性痤瘡や痤瘡瘢痕は患者のQOLを著しく低下させることがわかっているが、PIE、炎症後色素沈着 (post inflammatory pigmentation ; PIH) についても同様の結果が示されており、患者の約90%が「このまま治らないのではないか」という不安を持っており、治療ニーズは高い。また軽症であっても瘢痕を残すことが示されており、早期の介入による瘢痕予防も必要とされる<sup>8)</sup>。痤瘡治療に当たる医師のうち半数程度が希望する患者に対しPIE、PIHの治療を行っているが、その7割がビタミンCの内服外用となっており、デバイスなどを含めた積極的な治療介入には至っていない<sup>9)</sup>。これは、ビタミンC以外の治療が保険適用されていないことと、医師がどのように治療すべきか、どんな選択肢があるのかを学ぶ機会が少ないことも大きな要因と思われる。治療経験を次に示す。